

3 手順

全員をひとつの班に集め、実際にやりながら説明すると、すぐに理解できるようになります。

- ① 絵カードをひとり4枚ずつ配り、残りは裏返して重ね、班の真ん中に置く。
- ② 順番を決める。(時間を取らないように指導者が指定すると、すぐに始められる。)
- ③ 自分の番で、班のうちのひとりを指名し、自分が欲しいカードを持っているか尋ねる。
例：「陽子さん、Do you have “A”？」

- ④ 尋ねられた人は、そのカードを持っていれば渡し、持っていなければ“Go fish.”と言う。

例：“Yes, I do. Here you are.”

(持っている場合)

“No, I don't. Sorry. Go fish.”

(持っていない場合)



- ⑤ (相手からカードをもらった場合) 手持ちのカードと2枚をそろえて自分の前に置く。

(Go fishと言われた場合) 真ん中のカードの山から1枚を取る。このとき取った1枚とペアになったら、揃えて自分の前に置いてよい。

- ⑥ 手持ちのカードがなくなった人は、真ん中のカードの山から4枚取り補充する。真ん中のカードがなくなればゲーム終了。揃ったペアの数の多い人の勝ち。



4 活用のワンポイント ～英語をしっかりと伝え、聞く必然性のある活動に～

Go Fish ゲームでは、さまざまな英語表現を活用できます。例えば、5年生の「誕生日にほしいものを尋ね合う学習」のなかでは、“What do you want?” “〇〇さん、I want ~.” “This is for you. (Sorry, go fish.)” “Thank you.”という英語表現でやり取りするようにします。

ゲームを進めていくうちに、子どもたちは自ら「コツ」をつかみます。それは、「すべての人の話をしっかりと聞くこと」です。みんなが言っていることをしっかりと聞いていると、誰が何をほしがっているか(どんなカードを持っているか)がわかるので、次に自分がほしいカードを聞く相手が定まります。

わかった途端、ニヤニヤする子どもたちの笑顔を見て、「しっかりと聞いていたんだな。」と確認することができます。カードをやり取りする児童も、どのカードがほしいのか相手にわかるようにしっかりと伝え、聞く必要が出てきます。ゲームという遊びのなかで、しっかりとした英語によるコミュニケーションが必要となり、声にして伝える大切さも味わうことになるのです。

授業参観で保護者の方とも一緒に楽しんだときは、子どもたちはとてもうれしそうでした。先生方も、ぜひやってみてください。



※Go Fish は「釣りに行きなさい」という意味ではなく、「よそをあたって」「はずれ」といったニュアンスで使われるようです。なお、「釣りに行く」は正しくは go fishing となります。